

解釈としての「現象の救出」

——ベンヤミンと科学的プラトン主義——

長澤麻子

理念の叙述

ヴァルター・ベンヤミン (1892-1940) は多面的な様相をみせる思想家である。一九一九年に論文「ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念」で博士号を取得したように、学業を始めた頃のベンヤミンは、言語と文学に関する哲学に傾倒していた。しかし突如として共和制国家が出現するというドイツの現実に直面すると、急激に法治国家の根源へ関心を強めてゆく。ベンヤミンにとって、プロッホの『ユートピアの精神』が叙述表現の先達であり、ルカーチの『歴史と階級意識』が批判の基準であった。この時期、ベンヤミンは政治に関するいくつかの論考を書いているが、「暴力批判論」のみが遺っている^①。そのようなベンヤミンが数年後に『ドイツ悲劇の根源』を執筆する時には、再び芸術哲学の領域に戻り、彼の学んだ哲学的環境では主流であった新カント派を批判しつつ、現代芸術の基礎づけとなる芸術哲学の原理を追究する。このようにベンヤミンは、最新の政治思想を吸収し、いわばアヴァンギャルドな心意気をちらつかせるのだが、展開されている哲学原理は実に古典的である。ベンヤミンの『ドイツ悲劇の根源』の序論によると、芸術哲学とは芸術における理念の叙述であり、芸術分野において適切に分割された概念とそれを統一する原理や形式を示すことである。それゆえ理念の叙述といても叙述されるのは諸々の概念である。諸概念を明らかにすること

により、諸概念によって構成されている現象についての認識を示すことになる。ただし諸概念の統一としてのなんらかの理念は、概念や認識によつて直接得られるものではない。把握された概念に媒介されて、概念とはいわば別の次元で発見される原理や形式なるものである。それゆえ概念で現象を捉えるように、理念が捉えられるわけではない。理念は、諸概念の直接的連関、たとえば認識者の理性や悟性で理解され説明されるような因果関係などではない。ベンヤミンによれば、理念とは、現象の彼岸に「自ずと現れてくるもの (ein Sich-Darstellendes)」であり、所与の存在そのものである^②。そのような真理を哲学はめざしている。ベンヤミンの言葉を引用すると謎めいて響くが、諸々の概念や個別の諸現象から形式や原理を導き、対象を構造や体系によつて捉え直すことは理論構築の常套手段である。特に驚くことではない。気になるのは、ベンヤミンがここでプラトンのイデア論を持ち出すことである。

概念における統一として、真理は、一切の問いの外にある。概念が悟性の自発性に由来するのに対して、諸々の理念は、考察にあらじめ与えられている。理念は所与のものなのである。したがって、理念は存在として定義されることになる。これがイデア論が真理概念に対してつ射程である。存在としてこそ、真理と理念はプラトンの体系が強調してそれらに認め与えている、あの最高の形而上学

的意味を獲得するのである。^③

右の引用文における「概念が悟性の自発性に由来する」は、カント哲学に基づく概念の定義である。^④ ベンヤミンがカント哲学および学生時代に学んだ新カント派の哲学を超えようとしていることは確かである。ただしベンヤミンはそれをプラトン主義的に乗り越えようとしている。地動説が確たる地位を得て、思想の世俗化が久しく進み続けている時代にあつて、しかも唯物論的思考を獲得しつつあるベンヤミンに、プラトン主義はなんともそぐわないようにみえる。というのも理念と概念を、ある事物の構造や原理とその具体的な各構成要素のように、異なる観点で捉えることは、すでに述べたようにアイデア界を持ち出さなくても可能だからである。だがベンヤミンにおいては理念の叙述が哲学の根源的な課題であり、それは「最高の形而上学」と言い換えられ、プラトンの教理に基礎づけられている。一方、そもそもプラトンの教理では、現実世界の諸現象ではなくアイデアこそが実在であり、諸現象は仮象である。ベンヤミンの唯物論的思考とプラトンの教理は相容れないはずだが、いたい両者のあいだはどのように調停されているのだろうか。なぜベンヤミンは現代の芸術哲学の基礎にプラトン主義を持ち出したのか。このような「謎」は、ベンヤミンがプラトンを名指しつつ概念の機能を説明するとき、さらに深まってゆく。

もろもろの現象は、しかし、仮象が混じり込んでいる粗雑で経験的な状態のまま丸ごと理念界に入ってゆくのではなく、その諸構成要素に分解されたかたちでのみ、救出されて、理念界に参入する。諸現象は、その偽りの統一を放棄し、分割されて、真理の真正なる統一に参与するのだ。この分割において、もろもろの現象は、諸概念

の支配下にある。元々の事物を解体して構成要素に分けるものが、概念にはかならない。概念における弁別が、いたずらに破壊的なこうるさい区分けではないかとの一切の嫌疑を超越しうるのは、ただ、この弁別が現象を救い出して諸理念のうちを守ることを、すなわちプラトンの言う「現象の救出 (τὴ γανυόμενα σώζειν)」を、めざす場合だけである。概念は、その媒介者の役割によって、現象を理念の存在に参与させる。そしてまさにこの媒介者の役割こそが、概念を、理念の叙述という、哲学のいまひとつの同じく根源的な課題を果たすのに、有用ならしめるのだ。^⑤

現象が諸々の構成要素に分解され、それらが概念として把握され、これまでの関係から解き放たれば、新たな原理を見いだすことができる、という手続きは、先にも述べたように理論構築として不思議はない。それゆえ現象の分析について、現象の構成要素をいわば既存の関係から解放することである、と言いつつことにも違和感はない。この解体を解放と言いつつ換えてもよいだろう。このように分かれた構成要素に基づき、これまでとは異なる、あるいは真なる原理や形式の発見ないし構築は可能になる。そのような新たな原理や形式によって統一された理念が、直接にはプラトンの「真実在」や「アイデア」ではないが、それに近似するものである。それゆえ原理や形式は、理念の比喻や記号のような代替物といえる。このように、現象に対する分析と統合を行い、原理を通じて理念を現出させることについて、ベンヤミンは、それをプラトンの「現象の救出 (τὴ γανυόμενα σώζειν)」だといっているのである。それにしても「現象を救出する」とはプラトンにおいては奇妙なことである。ベンヤミンのドイツ語テキストではこの箇所はギリシア語で表記されているが、数行前にある「救出されて」という言葉はドイツ語では動詞 *retten* (窮地な

どから)救出する」が用いられているので、ギリシア語の *τα σωτηρια* *sotheia* の不定法の動詞 *sothein* をベンヤミンが「救出」と理解していることは間違いないだろう。だが先にも述べたように、プラトンが仮象である現象を救い出そうとしたとは到底考えられない。

プラトンの教理では、現象界において人間が自らの魂を善くする努力が実り、イデア界へ魂が戻ったとき、実在するイデアを観照することができるようになれば、その魂は救われたといえるかもしれない。つまり救出されるべきは、仮象の現象を誤って真実だと信じている人間の魂であって、現象界の現象そのものが救い出されるわけではない。そもそも椅子でも犬でも、現象界の事物はイデア界ではイデアとしてすでに実在し、現象界の各事物は各々のイデアを「分有」している。「分有」というのは、完全なイデアのうちどこかが欠けているような、不完全な状態が現象界の事物として現れている、という意味である。この「分有」されたイデアが刺激となつて、人間はかつてイデア界にいたときの記憶を完全ではないかもしれないが想起する。イデアが想起されたことにより、完全なイデアを構成する要素として認識対象の概念が獲得され、人間の認識は機能する。ただしプラトンにおいては、いくらイデアが「分有」されるといつても、イデア界と現象界は截然と異なる二つの世界であり、不完全な仮象の現象が完全な実在になることはない。つまり人間の魂は死後にイデア界へゆくかもしれないが、肉体をはじめとする個別の事物は現象界にとどまるか消滅する。それゆえ現象がイデア界へ救出されることはありえない。ではいったいベンヤミンの言う「プラトンの言う『現象の救出』とは何を意味しているのか。ベンヤミンはさらに次のように続けている。

「概念のこの働きのなかで、」理念による現象の救出が遂行されると

同時に、経験を手段とする理念の叙述が遂行される。というのも理念は、それ自身においてではなく、ただただ、事物的な諸構成要素を概念により分類しつつ関連づけることを通してのみ、現れ出る(みずからを叙述する)からである。しかも理念がそのように現れ出るのは、それらの事物的な構成要素の星座(Konfiguration)として、である。

あるひとつの理念の叙述に仕える概念グループは、その理念を、事物的な諸構成要素の星座として現前させる。というのも、もろもろの現象は理念それぞれのなかに同化されてはいないからである。現象は理念のなかに含まれていない。むしろ、理念それぞれは、諸現象の客観的な潜在的配置であり、諸現象の客観的な解釈なのだ。

このようにベンヤミンにおいて「現象の救出」とは、諸概念を叙述することによって理念が現れ出ることだが、そのような理念をベンヤミンは星座に喩える。すなわち星々の配置から星座——星座は星自体とは無関係である——が読み取れるように、諸概念のひとつひとつを星に見立て、諸概念の配置から星座のように理念が見いだされる、とベンヤミンは考えている。概念と理念の関係は、星と星座の関係に対比させられているのだ。

確かに夜空に輝く星は、私たちの目で知覚される事物であり、物質的な現実世界に属する現象である。一方、星座は現実の現象とは必ずしも言い切れない。おおぐま座を構成する星々は「おおぐま座」とギリシア神話では見立てられているが、日本ではその一部が「北斗七星」と呼ばれているように、星座は人間の「想像」の産物であり、「想像」する人間の観点によって異なる見え方が可能である。星座は物理的客観ではなく人間の主観的観点から最初は構成される。ただしそのような観念が神話

や物語、技術や知恵、倫理や慣習となつて複数の人間や共同体に共通する「客観的なもの」になつてゆく。つまり信憑性や蓋然性を纏いつつ、徐々に普遍的なものへ近づいてゆく。とはいえ、そのような観念の次元は、星をはじめとする知覚される事物の次元とは異なる。叙述は「経験的手段とする」、つまり概念を扱うゆえに現実だが、星座のように読み取られる理念、統一的な存在として現れてくる理念は、現実の事物に制限されない「普遍的な」観念である。ベンヤミンはこの理念を「解釈」と呼ぶ。このように経験的事物に対して一線を画している「解釈」は、その普遍性ゆえに「客観的」でもある。したがつて星座に喩えられる理念は「諸現象の客観的な解釈」であるが、その際、肝要なのは、理念と概念が、プラトンのイデア界と現象界のように異なる次元に属していることである。

つまりプラトンの二世界説の構造が、いわゆる此岸と彼岸ではなく、内在的超越として此岸における人間の精神の機能、認識の二重構造として継承されていると考えれば、ベンヤミンによる哲学の課題としての「理念の叙述」には、それ自体はプラトンの考えそのものではないが、プラトンの起源がある。確かに、プラトンにおいては魂が現象界とイデア界を往来するという確かめようのない教えが示されていたように、ベンヤミンの言うところの理念や真理に近づくためには、人間は理性を用いるしかない。そしてこの理性による認識や理論構築は、真理により近づくだけであつて到達はできない。このように概念と理念は架橋できないので、真理の領域にある理念は、ひとつの「解釈」として理解するしか人間にはなす術がない。だが、この「解釈」として人間には芸術があり、その原理が概念と理念のあいだを取り持つ記号やシンボル、なんらかの代替を用いる操作性なのだろう、というのが私の予測である。これもプラトンの幾何学の思考が源泉になる。『ドイツ悲劇の根源』の冒頭でベ

ンヤミンは「幾何学的方法」を論難しているが、この批判が当時の近代哲学や新カント派に向けられたものであつて、数学の哲学的意味が否定されているわけではないことを明らかにする必要があるだろう。少々勇み足をした。まだベンヤミンの言い分である「現象の救出」を救い出すことが出来ていない。というのも、救出される対象がなぜ「現象」なのか、という問題が解決されていないからだ。これには天文学における科学的思考の確立プロセスが関わっている。つまりベンヤミンの概念と理念が星と星座に喩えられたのは、彼の個人的な思いつきでも偶然でもない。そこには必然性がある。「現象の救出」がベンヤミンの認識批判に位置づけられる意味を理解するには、ギリシアの夜空の話から始めなければならない。

σώζειν τὰ φαινόμενα

先の引用で示したように、『ドイツ悲劇の根源』の序論では「現象の救出」という表現がプラトンに由来することを示唆するために、ギリシア語で表記されている^⑩。もちろん先に述べたようにプラトンは「現象を救出する」とは言っていない。とはいえプラトンと無関係ではない。σώζειν τὰ φαινόμεναという表現は、現存する文字テキストとしては、六世紀のネオプラトニスト、キリキアのシンプリキオスが書いた『アリストテレス天体論註解』^⑪によって知られている。シンプリキオスは、アリストテレスの『天体論』の第二巻第十二章における星の運行と天球の關係に関する註釈のなかで、プラトンが幾何学者たちに投げかけた問いに対して、クニドスのエウドクソスが仮説を立てて問題解決を試みたことを、紀元前一世紀のアレキサンドリアの天文学者ソシゲネスが伝えていると記している^⑫。それゆえ改めてここで新たな仮説を立てる必要はないというの

が、シンプリキオスの主旨である。そのシンプリキオスの言葉で示されたプラトンの問題および註釈には、確かに *οὐρανὸν τὰ κινήματα* が現れる。伝えられているプラトンの問いは次の如くである。

そして私「シンプリキオス」がすでに述べたように、プラトンは躊躇うことなく天体の運行の説明に円運動、斉一性、秩序を持ち出し、幾何学者たちに次の問題を課す。すなわち、斉一と円運動と秩序についてどのような仮説を立てると、惑星を含んだ現象の維持 (*σώζειν τὰ κινήματα*) が可能となるのか。^⑭

プラトンが求める仮説、その幾何学的な天体モデルは「惑星を含んだ現象」が説明できなければならない。惑星を示すギリシア語 *πλανήτης* は、動詞「*πλάνω* (惑わす)」の中動態「*πλανώμαι* (彷徨う)」から派生した「彷徨う者」の意味である。^⑮ 周知のように、夜空の星のほとんどが日々少しずつだが地球から見える位置を変えてゆき、季節が廻ると同じ位置に戻ってくるなかで、火星や金星は、惑い、彷徨う人のように、順行と逆行を繰り返す複雑な動きをみせる。この不規則な惑星の動きは——それが解明されるには近世の天文学者ケプラーの登場を待たねばならないが——、プラトンによれば、天空がどんなに美しく見えてもそれは仮象であり、真理を私たちが見ているのではないことの証拠である。真理には人間の感覚では捉えられない秩序や原理がある。惑星の動きが不斉一に人間に見えるのは、人間の理性がそのような天空の真実な姿、真理に到達していない、あるいは到達できないからである。それゆえ人間が学問としてすべきことは、観察記録という経験的事実を集積して天空を理解するのではなく、あるべき天体の運行モデル——プラトンはそれに円運動や斉一性を求めたが——を理性的に考察して発見し、それが実際の現

象と合致するかどうかを検証すべきだとプラトンは考えている。プラトンは『国家』のなかで次のようにソクラテスに語らせている。

「すなわち、天空にあるあの多彩な模様〔星〕は、それが目に見える領域にちりばめられた飾りであるからには、このような目に見えるもののうちではたしかに最も美しく、最も正確ではあるけれども、しかし真実のそれとくらべるならば、はるかに及ばないものと考えなければならぬということだ。真実のそれとはすなわち、真に実在する速さと遅さが、真実の数とすべての真実の形のうちに相互の関係において運行し、またその運行のうちに内在するものを運ぶところの、その運動のことであって、これらこそは、ただ理性（ロゴス）と思考によつてとらえられるだけであり、視覚によつてはとらえられないものだ。」^⑯

それゆえ、さらにプラトンがソクラテスに語らせているように、天空の星の運行について「——物体を具えた目に見える存在であるにもかかわらず——つねに斉一なあり方を保って進行しつづけ、けっしていささかも逸脱することがないと考える人、そしてそれについての真理をあらゆる手段をつくしてそこに求めようとする人」がいれば、それは奇妙な考えの人といえる。^⑰ なぜなら目に見える現象をまるで真実在のアイデアであるかのようにみなし、秩序から逸脱しないと考えるのは間違いだからである。それに対して、真の天文学者は「夜が昼に対して、昼夜が月に対して、月が年に対して、そしてその他の星々がこれらに対してまた相互に対して、いかなる正確な数的割合にあるかという問題について」は、幾何学に通じた人と同様に、「目に見える存在」そのもののなかに直接ありと考へて調べるわけではない。理性（ロゴス）で考へるのである。それ

ゆえあるべき仮説を立て、それを現象で検証する。仮説が現象に合致すれば、現象は真実在に比して不完全な状態ではあるが、知覚された姿のままに理解されることになる。

このように、知覚された現象が単に仮象として否定されるのではなく、知覚された現象の姿について説明できることが、*σοῦεν τὰ φαινόμενα* である。つまり *σοῦεν τὰ φαινόμενα* は、現象を現象のまま維持することであり、仮説が現象と齟齬を来たさなまいという、仮説を立てる時の条件である。そのようにプラトンの対話篇とシンプリキオスが伝えるプラトンの課題からは理解できる。ではなぜ、動詞 *σοῦε* の不定法である *σοῦεν* を、ベンヤミンは *zu retten* と理解し、「現象の救出」というプラトンらしからぬ内容をプラトン由来とみなしているのだろうか。

古代ギリシア語辞書 (USJ)^⑧ によると、*σοῦε* は事物に対して使われる場合はおおよそ英語の *preserve* の意味であり、人に対して使われるときはおおよそ英語の *save* である。それゆえだと思われるが、シンプリキオスの『アリストテレス天体論註解』の英語訳では *σοῦεν* の訳に *to preserve* が使われている。先の引用も私が意図的に英語訳から日本語に訳している。しかしもしベンヤミンのように *σοῦεν τὰ φαινόμενα* の *σοῦε* を「救出する」、すなわち *save* の意味に理解しようとすれば、*σοῦε* の対象は人間や人間の魂と少なくとも同等なものでなければならぬ。『アリストテレス天体論註解』において *τὰ φαινόμενα* にあたる具体的な事物はもちろん天体である。古代ギリシアでは、天は球形とみなされているので、*σοῦε* の対象はそのような天球とそのうえを転がってゆく星々を想定すればよいだろう。そのような天体は宇宙とも言い換えられる。

周知のようにアリストテレスの天体論はプラトンの宇宙論を前提にしている。プラトンの『ティマイオス』で宇宙論が展開されているが、「この宇宙は、神の先々への配慮によって、真実、魂を備え理性を備えた生

きものとして生まれたのである」とティマイオスによって語られている。この部分を初めとするティマイオスの宇宙論は、四世紀頃のカリキディオスによってラテン語に翻訳され、中世キリスト教世界に伝えられた。カリキディオス自身はおそらくキリスト教徒とみなされているが、ネオプラトニズム的な思想の持ち主だったようである。さらに彼の註解書によって、『ティマイオス』だけではない古代ギリシアの哲学世界が、キリスト教世界に共有され続けた。カリキディオスの書物を通じてキリスト教世界では、少なくともプラトンの教理を理解する時には、宇宙は人間と同様に理性を備えた魂をもつことから、宇宙自体が理性に満ちていると考えられても不思議はない。それゆえ天空の現象は人間の魂のように救出されるべきものと考えられ、*σοῦεν τὰ φαινόμενα* は「現象の維持」ではなく「現象の救出」と理解される余地は十分にある。カリキディオスは註解書の第六章「天について」でたとえば次のように書いている。

天はさまざまに語られ理解されている。一つには、ギリシア人がウーラノスと呼んでいる宇宙の表面のことである。それはあたかもオラノスのように、言わばそれを越えて伸ばすことのできないわれわれの視力の限界である。他方では、恒星天球と呼ばれる球のことである。それは本来は月の球より上にあるすべてのものことだが、通常はわれわれより上にあるものすべてのことである。その領域で雲が生じ、それよりいくらか上が星のある場所である。というのも、雨が天から降るとか、彗星とよばれる星が天に現れるとか、その他、月の球の下に現れるものも、天にあるとわれわれは言うからである。われわれは天という言葉を使って宇宙全体を呼ぶこともある。

九九 それゆえ彼「プラトン」は、宇宙の魂は「中心から宇宙の身体の端まで」広げられ、またそこからもう一方の端まで「身体の

球全体の周りに広まり、その全周囲を覆った」と言っている。このことから、宇宙は最も端の部分に至るまで、宇宙の生命を維持するものによって織り込まれ取り囲まれたことは明らかである。²⁴⁾

古代より天体は、現象界で知覚されるものなかでも特別な現象であったことがよくわかる。いまでは天体は地上の自然物と同じ自然物であるが、古代や中世の世界では現実世界あるいは世俗とは異なるイデア界や神的存在を信じることができるほど、天上と地上は次元の異なる世界であった。したがって両者の異質性は当然のことだったのだろう。確かにシンプリキオスが指摘するように、天体の運行が円運動であることにプラトンは疑念を抱いていない。それは円や球がもつとも単純な完全性を表していると考えられていただけでなく、実際に星々が球体であるという観察結果と合致していたからである。この円運動というプラトンの教えに従いつつ、プラトンの課題に答えるために、幾何学者であり天文学者でもあるエウドクソスは天体を計算し、優れたモデルを考案したと言われている。「太陽、月、惑星の複雑な見かけ上の通り道は、それぞれの場合に、ある特定の数の同心天球の単純な円運動によって生み出され」、「地球はすべての天球の共通の中心に静止しているが、天球の軸はお互いに傾いており、それらの天球の運動は均一ではあるが、それぞれ異なった速さで回っている」というモデルである。エウドクソスのモデルにしたがって惑星の周期を概算したシンプリキオスが示した数値は、現代の測定値に十分近似しているようだ。²⁵⁾

このように、プラトンは「現象の救出」とは言っていないが、プラトンの後継者やネオプラトニスト、とりわけ天文学者たちのあいだでは、プラトンの課題の解決が天空の現象を救出する彼らの使命として引き継がれてゆく。²⁶⁾それはガリレオまで続いた。ベンヤミンよりほぼ一世

代年長のドイツの哲学者エルンスト・カッシーラーは、近世科学史におけるプラトン主義の系譜を精緻に読み解いているが、そのカッシーラーによれば、ケプラーは「情熱的で熱心な計算家」であり、哲学的な思弁家であった。それゆえ数学的な計算はケプラーの哲学的志向、すなわち「天文学の成果である構造の規則性と運動の美しさ」の哲学的追求のための出発点にすぎなかった。²⁷⁾ただしケプラーは天体の回転運動を数学的仮説によって解明したが、数と調和がそれ自体で存在するとは考えていない。「調和と数は本来的に事物よりも神の精神の中に存在し支配し、次いで一方では物体的宇宙に、他方では人間精神に伝わる」とみなしている。つまり、確かに具体的な観測値や経験が先立つのではなく、「たとえ視覚が精神に具わっていなかったとしても、そのために精神は数と量の認識を欠くことはなかった」²⁸⁾のだが、そのような人間の精神を現実化するために視覚は欠かせない。このようにカッシーラーが捉えたケプラーは、なるほど『ティマイオス』的なプラトンの観念論から出発するが、現象を仮象として捨て置くのではなく観念の実現とみなす。この思考が近代的な実在論へと繋がってゆくのである。²⁹⁾

一方、ガリレオはプラトンの『ティマイオス』だけでなく、むしろ自然哲学とは関わらない対話篇『メノン』からプラトンの教えを継承しているとカッシーラーは指摘する。ガリレオが関心をもったのは、プラトンの想起説を示すときにしばしば引用される挿話だが、数学を習ったことのない若い奴隷が数学的に「発見」できるようにソクラテスが問答をしかける話である。ガリレオは『天文対話』で天体運動の観測事実を、繰り返し、幾何学的考察に基づき検証している。というのも、カッシーラーによれば、ガリレオは「真理は必然的普遍的であるから、経験だけによつては獲得できないし証明もできない」と考えていたからである。むしろガリレオは、プラトンのようにイデアが真実在であり、それが想

起されることを受け容れていたのではない。そうではなく、科学的真理や原理は経験の集積ではなく、理性による思弁によって獲得されると、ガリレオはプラトンの『メノン』から確信していた。ガリレオはそのような意味でのプラトン主義者であった。

確かに、すでにカリキディウスの時代であっても、テイマイオスの宇宙論のような汎神論的な世界観を、天文学者たちが共有したわけではない。しかしプラトンの幾何学的モデルの発見、つまり天体の現象に合致する原理を発見すること、しかもそのために数学を用いることは、感覚的世界からの脱出であり、つねにプラトン主義であった。それはアイデア界へ魂を救出するためではないゆえ、プラトンのとはいえないプラトン主義である。しかし天空に神の存在を信じていた人たちにとって、天文学は天上の学問であり、地上の学問である人文学と一線を画した神秘的な学問、ひとつの「神学」だったのではないだろうか。古代ギリシアの夜空は美しいだけでなく、満天の数学であり「神」の数学であった。

幾何学的方法と芸術

プラトンの課題を解こうとした天文学者たちがそうであったように、ベンヤミンも「現象の救出」のために、普遍的な原理や形式の発見を哲学の課題としている。ただしそれはプラトンのアイデア界を想定し、そこにあるとされる真実在を想起するのではなく、私たちの理性が経験に合致しつつ導いてゆく先における「発見」であり、数学的記号や幾何学的な図形のように、私たちの側からは「観念」ないし「イメージ」として表現されるものである。そのような理念をベンヤミンが「星座」に喩えるのは、「現象の救出」という思考がプラトン主義と天文学者の歴史のなかで熟成されてきた結果だからだろう。むしろベンヤミンが対象とする

のは天体現象でもその他の自然現象でもなく、人為の芸術である。それゆえ「現象の救出」が人為においても、なお星座として「客観的な解釈」であり得るのかどうか問題である。

この問いの結論をこの論考では出せないが、その基点として、芸術の存在根拠が理念と概念の関係を媒介する機能にあることを示唆しておきたい。すなわち、そもそも芸術の創造とは、記号やシンボル、絵画や彫刻のさまざまな表現技法、音楽ならば多彩な音と演奏技術を用いて、「客観的な解釈」としての理念を現れ出させることなのではないだろうか。というのも数学が数学的記号に代替されるように、また思考が言語で表現されるように、天文学者たちが「現象の救出」として示した原理や秩序、すなわちアイデア的な完全性の表現は、数字や数式、幾何学的図形、あるいはその他のなんらかの印によって表現されてきたが、このような形式は人間の認識機能の基本のように思われるからだ。たとえばカッシーラーはケプラーについて次のように書いている。

彼「ケプラー」は科学的探究を通じて象徴「シンボル」、さらには寓意「アレゴリー」や隠喩にくりかえし訴えている。彼はあたかもそのような象徴によるのでなければ生きることでもできないかのようなのである。だが一方では、彼の中でたえまなく新たに生まれてくる、この溢れるほど豊かなイメージを解明し、批判的に捉ええる態度ももちあわせている。かつて彼は書簡の中ではつきりと述べていた。「私も象徴と戯れるが、……しかし戯れに関わっていることをけっして忘れないように戯れている。なぜなら象徴によってにはなにごと証明できないからである。実際それが単なる比喩や類比であるのではなく、明白な因果関係、真の因果的結合をともなっていることがたしかな根拠によって証明されなければならない。」³³

ケプラーの言葉にあるように、象徴やイメージそれ自体は何も証明しないが、それらが私たちの世界と真なるものを媒介することができるとゆえに、それらを用いて科学的思考は表現される。そしてそのような表現における形式は、芸術の創造においても同様の構造をもつのではないだろうか。確かにベンヤミンは『ドイツ悲劇の根源』の序論のモットーをゲーテの色彩論から引用しつつ、哲学ないし学問の完全性を求めるときには「学問を芸術として思えばかなければならない」ことを示唆している。³⁴つまりここでは芸術が完全性をめざす学問のお手本になっている。これには十九世紀の近代科学や哲学に対する批判が込められているといえる。芸術が完全性である理念を作品に込めることができるはずれば、それは芸術における「現象の救出」である。しかしそもそも「現象の救出」は天文学に対するプラトンの課題である。そしてこの天文学から「コペルニクスの転回」を経て、近代的な科学思考が発展してきた。ところが、いまや科学や幾何学的方法は「現象の救出」のために芸術を模範としなければならぬ、とゲーテやベンヤミンから指摘される。というのも近代科学やそれを範とする哲学は「現象の救出」という本来の課題を見失っているからである。

天文学者も芸術家も、また芸術を対象として思考する哲学者も、いわばプラトンの「イデア」ともいえる存在形式や秩序、原理といった「完全なもの」、「自ずと現れてくるもの (ein Sich-Darstellendes)」を、人間が扱っている数学的記号や芸術的技法、あるいは概念言語を駆使して叙述する (darstellen)。それにより現象は理念にもとづいて、あるいは理念と整合性をもって認識あるいは知覚されるようになる。叙述の形式や手法は、数式、絵画や詩、あるいは哲学的エッセイなどであり、それぞれに主題がある。描き出される主題の統一性はひとつの「イメージ Gebilde」

として叙述に現れる。この具体的に描きだされた「イメージ」が、「イメージ」の完全な姿である理念の印となつて、現実的な概念と理念を媒介する。それゆえ、あらゆる人間の精神活動がそのような媒介的印を伴っているといえる。『ドイツ悲劇の根源』において、「芸術哲学的な論述にいう意味でのバロック悲劇とは、ひとつの理念である」と示されているように、ベンヤミンはそのような原理に基づき、芸術哲学のひとつの理念である「バロック悲劇 Trauerspiel」を叙述する。

またカッシーラーもプラトンの対話篇における美と芸術の問題を論じた講演「エイドスとエイドローン」で次のように語っている。

生成の現象自体が、そこに現れてきた純粹な数の関係によつて、それが適合していた数学的秩序によつて永遠の存在形式の王国を指し示していた。それゆえこの現象は、永遠の存在形式を単に隠していないだけでなく、同時に啓示してもいた。芸術家が創造するイメージ (Gebilde) は、同様に覆いとしての啓示と同じ意味ではないだろうか。たとえイメージは決して理念に匹敵しないとしても、また理念に対する適切な表現を創造しないとしても、少なくとも理念に対するシンボリックな表現を与えることはないのだろうか。というのも、あらゆる美しいものが、いつもそれが個別のものなかに作られているように、そして私たちがそれを自然美あるいは芸術美として考えるとしても、結局は純粹な数や基準の規定に基づいているということ、プラトンにとつては少なくとも疑い得ないことである。³⁵

「理念にシンボリックな表現を与えること」とは、まさに理念をシンボリックな表現で印すことによつて、概念の側にある私たちが理念へ近づく方法といえる。そして個別のものな美しさもそれ自身の数値や尺度ではな

く、理念として個別のものとは別次元に基準があるとすれば、プラトンははつきりと認めないかもしれないが、プラトンの教理に実は適っている。それゆえ芸術表現は人間における「シンボリック」な認識機能といえる。このようにベンヤミンとカッシーラーのプラトン受容における親近性が予想される。また、カッシーラーが「プラトンにとって認識はすべて、諸概念の分析であると同時に統合でもある」と言っているのは、分解したものを単にもとの通りに組み立て直すということではない。そうではなく「分離された諸契機を再び統一的なイメージへと統合する」と、問答法によって真に近づくために分析と統合を行うことである。^⑧これは、概念による現象の分割や分析が、プラトンの「現象の救出」のため、すなわち理念という統一へ構成できる場合のみ効力を発揮する、というベンヤミンの言葉と合致する。

人為の芸術が理念の「客観的な解釈」であり、それゆえ芸術が科学と同様に人間の理性や精神に不可欠であることは、ベンヤミンとカッシーラーの思想的共通基盤を手がかりにすれば、そこに神話から解放された「現象の救出」が見いだされるに違いない。

注

- ① Honneth, A., *Eine geschichtsphilosophische Rettung des Sakralen. Zur Benjamin's „Kritik der Gewalt“*. In: Honneth, A., *Pathologie der Vernunft, Suhrkamp/Frankfurt am Main*, 2007, S. 113. ホネット「マクセル著『神聖なるものの歴史哲学的救済：ベンヤミンの〈暴力批判〉論」拙訳、同著『理性の病理』出口剛司監修、法政大学出版局、2019年、139頁以下。
- ② Benjamin, W., *Ursprung des deutschen Trauerspiels*. In: Benjamin, W., *Gesammelte Schriften I/1*, Hrsg. von R. Tiedemann und H. Schweppenhäuser, Suhrkamp/Frankfurt am Main, S.209. ベンヤミン著

『ドイツ悲劇の根源』浅井健二郎訳、筑摩書房（ちくま学芸文庫）、1999年、22頁参照。

③ *Ibid.*, S.210. 同書、23頁。

④ Kant, Immanuel, *Kritik der reinen Vernunft*, Hamburg: Felix Meiner Verlag, p.63 (A19/B33-34).

⑤ *Op. cit.*, Benjamin, S.213-214. 前掲書、ベンヤミン著『ドイツ悲劇の根源』（上）、30-31頁。

⑥ プラトン著『パイドン』林一功訳、京都大学学術出版会、2007年、82F-83A：240-241頁参照。

⑦ 同書、74A：214頁以下参照。

⑧ *Op. cit.*, Benjamin, S.214. 前掲書、ベンヤミン著『ドイツ悲劇の根源』（上）、31-32頁。

⑨ プラトン著『メノン』藤沢令夫訳、岩波書店（岩波文庫）、1994年、47頁（81B-C）。

⑩ „Die Unterscheidung in Begriffen ist über jedweden Verdacht zerstörerischer Spitzfindigkeit erhaben nur dort, wo sie auf jene Bergung der Phänomene in den Ideen, das Platonische *τὰ γενόμενα* *ούτως* es abgesehen hat.“ Benjamin, GS, Bd.I/1, S.214. 傍線は筆者による強調。

⑪ Simplicii (490-560), *In Aristotelis De Caelo. Commentaria*, I. L. Heiberg (ed.), Berolini: Typis et impensis. G. Reimeri, 1894.

⑫ *Ibid.*, p.488ff. エウドクソスは紀元前四世紀の初め頃に生まれ、数学と医学を学んだ後にアテネを訪れ、プラトンと出会う。その後エジプトへ渡り天文学を学び、紀元前三六七年に、再びプラトンを訪れている。Vgl.: *Grundriss der Geschichte der Philosophie*. Hrsg. von Holzhey, H., Schwabe Verlag/ Basel, 2004, S.56ff. テイオゲネス・ラエルティオオスの『ギリシア哲学者列伝』（第八巻第八章、岩波書店（岩波文庫）、1994年、83頁参照）では天文学者、幾何学者、医者、立法家であったと記されている。シンプリキオスはプラトンが問いかけた相手を *τοῖς μαθηματικοῖς*（数学者、幾何学者、天文学者を含む。LSJ, p.1072 D）と複数形と格で示しているのど、プラトンは特定の人物（たとえばエウドクソス）に対して課題

を出したのではなく、プラトンの基本的な考え方として伝承されていることを意味しているのだらう。

⑬ なお英訳者 Mueller Jan によると、エウデモスのテクスト一四八 (Wehrli, Fritz, *Die Schule des Aristoteles*, Bd.8, Basel: Benno Schwabe & Co., 1955) およびエウデモスの断片二二二 (Lasserre, François (Herausgeber und Übersetzer), *Die Fragmente des Eudoxos von Knidos*, Berlin: Walter de Gruyter, 1966) 二つの議論は示やれつゝるのだが、筆者は未確認である。

⑭ Simplicii, In Aristotelis de Caelo. Commentaria. Heiberg, J. L. (ed.), Berlin, 1894, p.492-493.; Simplicius, On Aristotle's „On the Heavens 2.10-14“, Mueller, I. (tr.), Iaca, N.Y.: Cornell University Press, 2005, p.33.

⑮ ロイド著『初期ギリシア科学——タレスからアリストテレスまで』山野耕治・山口義久訳、法政大学出版局、一九九四年、124-125頁参照。(G. E. R. Lloyd, *Early Greek Science. Tales to Aristotle*, 1970)

⑯ プラトン著『国家』(下) 第七卷一 (530B) 藤沢令夫訳、岩波書店(岩波文庫)、135頁。

⑰ 同書、136-137頁、参照。

⑱ *Greek-English Lexicon*, Liddle & Scott, with a Supplement by H. S. Jones, Oxford, 1968.

⑲ Op. cit., Simplicius, *On Aristotle's „On the Heavens 2.10-14“*, p.33.

⑳ プラトン著『テイマイオス』種山恭子訳、プラトン全集第十二巻所収、岩波書店、1975年、32頁。

㉑ カリキデイウスについては、現存する『テイマイオス』のラテン語訳と註解書の著者であること以外は知られていない。カリキデイウス著『プラトン「テイマイオス」註解』土屋陸廣訳、京都大学学術出版会、2019年、443頁参照。

㉒ 前掲書、カリキデイウス著『プラトン「テイマイオス」註解』、135-136頁。

㉓ 前掲書、ロイド著『初期ギリシア科学』、126-128頁。

㉔ 同書、128頁参照。

⑳ そのような近代に至るまでの科学史が、一九〇八年に奇しくも『現象の救出 *σώζεν τὰ πανόλενα*』というタイトルでフランスの数学物理学者ピエール・デュエムによって発表されている。ベンヤミンがこの本を読んだかどうか、私にはまだ確認できていない。ベンヤミンにおける「現象の救出」という表現はそのギリシア語表記の語順が、シンプリキオスのそれとは異なるので、内容的にはプラトニズム的天体論に由来するのだろうが、デュエムの著書が直接の典拠ではないと思われる。Cf. Duhem, Pierre, *σώζεν τὰ πανόλενα. Essay sur la notion de théorie physique de Platon a Galilee*, Paris, 1908. ちなみにこの著書の英訳タイトルは “To Save the Phenomena” (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1969) である。

㉑ カッシーラー、エルンスト著「ヨーロッパ精神におけるケプラーの位置」伊藤和行訳、同著『シンボルとスキエンティア』所収、ありな書房、1995年、122頁参照。

㉒ 同書、129頁。

㉓ 同書、129頁。

㉔ 同書、130頁参照。

㉕ プラトン著『メノン』藤沢令夫訳、岩波書店(岩波文庫)、1994年、50頁以下参照。

㉖ カッシーラー著「ガリレオのプラトン主義」、前掲書『シンボルとスキエンティア』所収、141頁参照。ちなみにカッシーラーはデュエムの『現象の救出』(本稿註⑳)を「ガリレオのプラトン主義」で参照している(同書、243頁、註21参照)。「彼ら「天文学者たち」はきわめて精巧で複雑な天球の体系を築きあげ、その構築物によってあらゆる既知の事実を説明し、『現象を救う』ことを試みた。しかしそのことは、これらの仮設的なものが『現実の』ものであることを意味していない。この点に関しては、プラトン学派の中で教育されプラトン思想に染まっていた天文学者や哲学者にとつてはいかなる誤謬もありえなかった」(同書、145頁)。このようにカッシーラーによると、プラトンのイデア論的實在論はプラトン主義の天文学者や哲学者に支持されていなかった。仮説(仮設)はイデアとして実在するのではないという意味において「現実の」ものではなかった

のである。

- ③② とりわけ数学は記号に溢れているが、このような科学的思考ないし科学的「理念」と記号の関係は、ライプニッツが積分記号として \int を用いたり、カントールが無限の性質を示す数式に \aleph （アレフ）を用いたりしているように、現代まで続いている。カッシーラーはホーアの原子構造の例を挙げている。（前掲書、カッシーラー、エルンスト著「ヨーロッパ精神におけるケプラーの位置」、126頁参照。）
- ③③ 前掲書、カッシーラー著「ヨーロッパ精神におけるケプラーの位置」、125頁。
- ③④ 「知識には内的なものが欠けており、反省には外的なものが欠けているので、そのどちらにおいても完全なものもたらされることはありえない。それゆえわれわれは、学問になんらかの完全を期待するのであれば、必然的に、学問を芸術として思いえがかねばならないのである。」（ヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ『色彩論の歴史のための資料』（前掲書、ベンヤミン著『ドイツ悲劇の根源』（上）、16頁。）

③⑤ 前掲書、ベンヤミン著『ドイツ悲劇の根源』、43頁。

- ③⑥ Cassirer, E., *Eidos und Idolon. Das Problem des Schönen und der Kunst in Platons Dialogen*. In: Aufsätze und kleine Schriften (1922-1926). Gesammelte Werke, Bd. 16, Hrsg. v. Birgit Reeki, Hamburg: Felix Meiner Verlag, 2003, S.153-154. [Zuerst veröffentlicht in: Vorträge der Bibliothek Warburg, hrsg. v. Fritz Saxl, Bd. II: Vorträge 1922-1923, I Teil, Leipzig/Berlin 1924, S.1-27.] この時期カッシーラーはハンブルク大学の哲学教授であり、同地のヴァールブルク文庫とは強い知的繋がりがあった。他方ベンヤミンはヴァールブルク文庫と直接関わっていないが、アビ・ヴァールブルク、パノフスキーらの著書は『ドイツ悲劇の根源』で参照されている。ベンヤミンが星座の比喩を用いたのは、彼らの著書の影響があったと予測される。

③⑦ Cf. *ibid.*, S.136.

（本学文学部教授）